Kwansei Gakuin University

ゲオルク・ビューヒナーのリアリズムについて

—解剖学研究と美学に関する考察—

加　藤　智　也

0．はじめに

文学史においてリアリズムに分類されるビューヒナー（Georg Büchner, 1813-1837）は理想主義詩人に対するアンチテーゼとして存在している。彼はシラーを代表格とした理想主義詩人の作品に「気取ったパトス」（PW2.S.411）しか認めることができず，「血肉を備えた人間」（PW2.S.411）が登場しているとは思わなかったのである。しかし，我々はビューヒナーがシラーを批判しながらも，「ゲーテを高く評価している」（PW2.S.411）という事実をどう理解すべきであろうか。ゲーテもシラーと並び古典主義文学の一角を担っており，『タッソー』や『タウリス島のイフィゲーニエ』に代表されるように人道主義を求める理想主義的な美を追求した作家なのである。ビューヒナーがゲーテを評価していることの理由を文豪ゲーテの多面的な特徴の中に求めるとすれば，それは彼の自然科学研究にあるのではないか。ビューヒナーはゲーテの文学作品に自然科学者としての視点を感じ取り評価したに違いない。次の逸話はゲーテのものの見方をよく表している。

ゲーテはシラーに植物のメタモルフォーゼを説明しながら，植物研究から導き出した架空の「根源植物」なるもののデッサンを見せた。シラーはこれに興味を示したものの，それは「経験ではない，理念です」と言った

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

という。[1] シラーが理念の領域で美的なものを見出すことに満足したのに対し，ゲーテはそれをあまりにも直感的に感じ取るため，視覚的に捉えようとするのである。たとえ「根源植物」が理念であったとしても，それは彼にとって思弁的なものではなく生き生きとした理念であり，具体的なのであった。[2] この逸話は両者の本質的な資質の違いを表しているが，筆者はゲーテのこのような資質が解剖学者であったビューヒナーにも見られると考える。つまり，彼らの職業上の手法はものを見るという行為であるが，それが共通しているのである。ビューヒナーはゲーテの自然科学研究に関して何も発言していないが，彼のスピノザ的な「直観知」に感銘を受けたのではないか。本論考ではビューヒナーの美学観を解剖学研究との関係において考察したい。

1．解剖学と美学

ビューヒナー文学には解剖学に関連する表現が見出されるが，それを最初に指摘した人物は『ダントンの死』*Dantons Tod* の出版の仲介をしたグツコーだと思われる。彼はビューヒナーが医学研究を断念すると聞きつけたとき，彼の作品の「主要な長所」（PW2.S.441）である「世にも珍しい偏見のなさ」（PW2.S.441）が「解剖学的実証」（PW2.S.441）に由来することを見出し，研究を続行するよう忠告している。この忠告はビューヒナーが『ダントンの死』の冒頭場面や『ヴォイツェック』*Woyzeck* において解剖学の知識を豊富に用い，作品の特徴を決定付けたことへの賛美として行われたのではない。むしろ，グツコーはビューヒナーの作家としての視点が社会の現実を純粋に描写するのに適していると捉え，文学を通じての社会改革者として利用しようとしたのであった。しかし，いずれにせよこのグツコーの指摘はビューヒナー文学を知る上で有益である。なぜなら，我々がビューヒナーの解剖学に由来するグロテスクな表現に目を奪われる前に，彼の美学観つまり対象への認識方法に迫らせてくれるからである。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ビューヒナーの美学は体系的な著書としてまとまっていないが，書簡や作品に点在する美学に関する発言を収集し，それを再構築することができる。とりわけ，彼は『レンツ』*Lenz* の主人公に自らの美学観を投影させている。以下の「芸術談議」に注目した。

> 私は全てのものの中に生命，存在の可能性を求める。それがあればもういいのです。私たちはさらにそれが美しいか，醜いかを問う必要はありません。創造されたものが生命を持っているという感覚は，美醜の上に立つものであり，芸術作品における唯一の規範です。[...] 一度試しに最も取るに足らないものの生活の中に沈潜して，その生活を，かすかな動きや，わずかばかりの兆候，繊細でほとんど認めがたいような表情において捉えて描写してみるとよいのです。(PW1. S.234)

グツコーが指摘したビューヒナー文学の偏見のなさは，『レンツ』の「それが美しいか，醜いかを問う必要はありません」という部分に集約されている。ただ，ここで注目したい点はビューヒナーが偏見なく物事を描写することを主張しながらも，同時に「かすかな動きや，兆候において，繊細なほとんど認めがたいような表情において」対象を捉えようとする姿勢である。つまり，ビューヒナーは人間を理念に照らし合わせ，抽象化し，普遍化して描写するのとは対照的に，事物を局所化して捉え繊細な感性で描写することを主張しているのである。この対象へのアプローチの仕方は標本をメスで切り開き，組織の関連を目で追う行為に等しいと思われるが，それがグツコーの目に留まったのである。

ところが，ビューヒナーはレンツに「私は全てのものの中に生命，存在の可能性を求める。それがあればもういいのです」という美学観を語らせている。そこにはビューヒナーが自然主義のごとくただ客観的に対象を分析するのではなく，生命の意味を常に問い続けた哲学者の姿が垣間見られ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

る。このことは彼が解剖学研究から学んだ最大の成果であることを強調しておきたい。

ビューヒナーの解剖学と文学創作との関連性については従来から指摘され続けてきた。例えば，H・マイヤーはビューヒナーには自然科学者としての「世界像」が疑いもなく存在することに着目し，「それは思考し，創作する芸術家の世界像と同じ要素から構築される」[3]と指摘している。つまり，彼はビューヒナーの自然科学と文学とが統一的な世界観に基づいていることを指摘している。それに対し，O・デーナーはビューヒナーの自然研究における概念には「19世紀前半の自然理解の転換」[4]が認められるため，専門用語の概念規定もなされていないとして，文学と自然科学を容易に関連させることに消極的である。そして，H・マイヤーの見解を批判している。確かに，綿密な研究を行うにつれてビューヒナーの自然科学は文学とかけ離れていることが判明してくる。しかし，彼が解剖学を通じて獲得したものの見方が存在するということを否定し得ない。以下，それが文学に通じる美学観を形成しているということを考察する。その前にビューヒナーの解剖学研究の歴史的位置づけを行う必要があるだろう。

2．自然哲学と自然科学の狭間

19世紀の自然研究や医学は，自然哲学から自然史的な考察方法を経て自然科学の段階に到達したのであったが，ビューヒナーは自然哲学の段階に属すると言われている。[5] しかし，近代の自然研究においては様々な学派が存在し，相互に影響を与えあったこともあり，ビューヒナーを単なる自然哲学者として片付けることは難しい。この章では近代の自然科学史の流れを考察し，ビューヒナーの自然研究者としての位置を確定したい。

ヨーロッパにおける自然研究の発展を考察する際には，まずそれが宗教と密接に関わってきたということに着目しなければならない。特にイギリスにおいてその特徴が顕著に見られるが，そこでは神の存在を立証するた

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

めに自然の中に神の叡智を見つけ出そうとする自然神学が発達した。[6] しかし，それはイギリスに限らず全ヨーロッパ的な現象でもあった。

ところが，このような自然神学の神話的手法に異論を唱えたのがカント（Immanuel Kant 1724- 1804）である。カント哲学の原点はニュートンに基づいていることはよく知られている。ニュートンは現象の働きを問う際に，数学的な手法でもって物体の運動法則を観測し，そこから得られる経験的な現象のみを頼りにすること，つまり「ニュートンスタイル」を確立したのであったが,[7] カントはそれに倣い自然神学の誤謬を指摘した。彼によれば，自然法則が諸現象の背後にある神の意志に基づくとする説は，人間が自然法則を無責任にも設計者に求めた結果生じた誤りであり，客観的に証明できない人間の「内省的判断の統制原理」に属するものであるとして斥けられたのである。つまり，カントは現象を問うことに終始し，その根本理由を問うことは不可能であるという立場を取ったのであった。そして，神を問うことを人間の内面としての宗教に限定させ，自然科学を宗教から独立させたのである。

近代科学の下地がドイツにおいて確立されたのであったが，このような合理主義的な知性は支持されるどころかむしろ反発にあった。哲学的で思弁的な手法によって自然を理解しようとする傾向，すなわちロマン主義やシェリングの自然哲学が反発を強めたのである。このような傾向はヨーロッパ全土に広まっていた。例えば，スイスの博物学者ハラーはニュートン力学に基づき，筋肉の神経反応についての研究を行ったのであるが，彼の弟子たちはそれを有機体の生命の力によるものとして「形成力」,「生命力」と呼び，客観的に計測することを避けた。1780年代から1830年代の自然研究においては生命の発達の根拠を問うために，有機体の成長に関する観察が台頭したのであった。[8] つまり，合理主義に基づく客観的な数量化では計り知れない事柄を問う傾向が生まれたため，観察と思弁的な構想力が再び息を吹き返したのである。ビューヒナーはこのような時期に活躍し

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

たのであった。しかし，彼は自然哲学と合理主義的な近代科学との狭間で揺れ動いていたと解釈する方が妥当である。以下の『頭蓋神経について』*Über Schädelnerven* の冒頭部分がそれを表している。

> このような法則への問いはおのずから，絶対的な知識の熱狂が以前から興奮していた認識の源泉へと，すなわち神秘主義者の見解と理性哲学者の独断論に向かいます。理性哲学とわれわれが直接知覚する自然の生命との間に橋をかけることがかつて成功したかということに対して批評は否定せざるを得ません。（PW2. S.159）

この箇所は科学の根底となる精神について論じたものである。「神秘主義者」と「理性哲学者」という対立する勢力が引き合いに出されているが，前者はシェリングを代表とする自然哲学者であり，後者はデカルトからカントまでの啓蒙主義に依存する合理主義哲学を指す。そして，最初の「このような法則」とは自然の調和を表す法則を意味し，ビューヒナーはそれを問うた今までの神秘主義，つまり自然哲学と理性哲学の両方に問題点を認めている。特に恩師であったオーケンの専門分野である自然哲学に問題を認めていることには驚かされる。ビューヒナーはドイツ本国のみならずストラスブールにおいてキュビエの弟子であるデュヴェルノアの下で生理学を学ぶ機会を得たため，「諸国の様々な学派を冷静に眺める」[9] ことができる状況にあったのである。このようにビューヒナーは学問の水準を客観的に判断できた訳であるが，特にここでは彼が「理性哲学とわれわれが直接知覚する自然の生命との間に橋をかけることがかつて成功したか」という問いに対して，否定的である部分に着目したい。というのも，ビューヒナーは「神秘主義者」の哲学の熱狂的な部分を批判しているが，この箇所があることにより，「理性哲学者」に対しては重ねて批判していると考えられるからである。このことから筆者は，ビューヒナーが合理主義者の数

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

量化による科学には「自然の生命」を感じ取ることがないとして反感を抱いたと推測する。従って，彼は合理主義による科学と自然哲学の思弁的な手法の間で揺らいでいたが，比較的自然哲学に近かったと言えるのである。

3．ビューヒナーの解剖学研究

ビューヒナーは少年の頃から医師である父が解剖に勤しむ姿を眺めていたため，解剖という行為にまつわる不気味さや恐怖心というものから疎遠であったと推測できる。しかし，直接彼に解剖学の興味を喚起したのは父ではなく，カウプ博士という人物であった。彼は博物館の一室で度々実演による解剖学講義を行っていたのであるが，それが後にビューヒナーの自然科学，解剖学への関心を惹くこととなった。そして，彼はギムナジウムを卒業後，ストラスブールで比較解剖学の権威でキュビエの弟子であったデュヴェルノワの下で生理学を，そしてラウトの下で自然哲学を修めることになったのである。その後，ビューヒナーはギーセンへ帰郷しヴェルネキンクの講義を聴講したことにより，『ニゴイの神経系に関する覚書』*Mémoire sur le systéme nerveux du barbeau* の講義へ向けて準備を開始したと考えられる。[10]

ビューヒナーは解剖学者として人体を対象とせずニゴイを用いた。ニゴイとは今日絶滅危惧種の一つに数え上げられるが，19世紀においてはライン川より西の川に多く分布していたコイの一種である。ニゴイは「コイの中のプロレタリアート」と呼ばれ，脊椎動物の中で最も単純な神経系を持つ種であるが，[11] ビューヒナーはこの生物を標本にして脊椎動物が系列の低いものから高いものへと至る際に，脊椎神経，頭蓋椎骨，脳神経の数がどのような法則で増減し，また分布の複雑化や単純化が行われるのかということを問題にした。そして，それを観察するには「発生論的方法」を用いる以外に方法がないことを強調する。「発生論的方法」とはビューヒナーによれば「脊椎動物の神経系を最も単純な構造のものからはじめて少しず

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

つ高等なものへと進みつつ，可能な限り綿密に比較研究していく」（PW2. S.69/504）方法である。この方法はシェリングの進化論的発想と類似するものであるが，新プラトン主義のいう低い次元のものは高次のものから派生するという概念を覆すものである。[12] ビューヒナーがこのような方法論でニゴイを解剖したことは注目に値する。なぜなら，生命の根源を最も低い次元から問う手法は解剖学のみならず，彼の文学創作，政治活動を含めた全ての領域において共通する特徴だからである。

ビューヒナーの具体的な研究内容について以下にまとめたい。本論考は彼の解剖学をテーマとしているものの，決してその成果について検討するものではない。筆者はビューヒナーが解剖学研究を通じて得たものの見方に着目していることを確認しておきたい。しかし，彼の解剖学研究において問題とされたことについては多少なりとも言及しておきたい。次の箇所がそれを明白に表している。

> ［オーケン］は頭蓋が一つの脊柱であるといったのですが，そうすると脳は変態した脊髄であり，脳神経は脊髄神経であるということになりました。しかしどうやってこれを詳細に証明するかは今日でも難しい問題なのです。（PW2.S.160.）

ビューヒナーは脳の成立過程において，それぞれの未発達な組織がいかに高度な脳として形成されるのかということに関心を抱いたのである。そして，その生成に関する仮説がニゴイの頭蓋腔にある脳神経を脊髄との関連において観察することにより立てられる。その観察とは概ね次のようなものである。

まず，ビューヒナーによれば神経は「基本神経」と「派生神経」の２種類に大別される。そのうち魚類に存在する脳神経のうち嗅神経，視神経，三叉神経，聴神経，迷走神経，舌下神経の６対が全ての脊椎動物の種類に

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

も存在していることを前提としながらも，これらの神経が脊髄に付着し，脊髄神経として形成されていることを確認する。そして，これらの脊髄に付着する神経を「基本神経」と名づけている。一方，顔面神経，舌咽神経，ウィリスの副神経は爬虫類，鳥類というように種類が異なるにつれて迷走神経や三叉神経に分かれることもあれば，交わったり，消えてしまう場合もあることを確認する。そして，これらの神経を迷走神経ならびに三叉神経からの「派生神経」と呼ぶ。このような区別の根拠として，彼は「基本神経」がそれぞれ脊髄神経として，脊椎といった骨部に対応しているのに対し，「派生神経」は骨部に対応しておらず，極めて独立的に発達していることを突き止めている。そして，このような「派生神経」が発達した結果，哺乳類のような高度な生物に至っては表情が生まれるという。ビューヒナーは脊髄と「基本神経」との密接なつながりを観察した結果，頭蓋骨は引き伸ばされ，適合化された脊柱であり，脳は脊髄の特殊ケースであり，脳神経は脊髄神経と同等のものであるという仮説，つまり「脊椎理論」を支持している。[13] 従って，ビューヒナーはオーケンやゲーテにより提唱された形態論的な視点から生命の発生を考察したものと考えられる。そして，神経は高度に派生することにより，視ること，聴くこと，嗅ぐことなどの高度な感官に到達すると考えたのであるが，たとえ下等なニゴイのような脊椎動物においてもその根源が存在することを強調している。そのことをよく表しているのが以下の箇所である。

> 特殊な感覚器官が，あらゆる神経の営みが鈍い基本感覚の内に成立している最も単純な有機体から始まり，次第に分化されて形作られていく様を徐々に追及していくことが可能です。それらの感官はなんら新しく付け加えられたものではありません。それらはより高度の能力をもった変態に過ぎないのです。（PW2.S.162）

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ここにビューヒナーの生命に対するものの見方が明確に現れている。ビューヒナーはストラスブール時代にキュビエの弟子であったデュヴェルノワの下で学んだため，このような形態論的な視点ではなく，厳格な数量化とデータ化により観察を行う可能性があった。しかし，彼がその方向へと進まなかったということは，独自の路線を確立していた自立的な研究者であったことを意味すると同時に,[14] ものの見方が確立されていたことを意味する。つまり，彼は数量化により自然をただの客体として把握する手法に終始するのではなく，観察を通じ根源的なものから発達した生命の働きを考察するのである。ここに彼のリアリズム観が隠されているのではないだろうか。

4．目的論批判に関する諸解釈

この章では彼が学んだ生命体の形成過程を美学観や社会認識と関連付けることが可能であるかということを問いたい。その際，いくつかの見解を参照するが，ビューヒナーによる目的論批判が問題となる。以下に『頭蓋神経について』からそれに該当する箇所を挙げた。

> わたし達は生理学と解剖学の分野において二つの対立する基本的見解を見ることができます。それは一方がイギリスとフランスで，また他方がドイツで支配的であるといったように国民的な特徴さえ帯びています。前者は有機的生命のあらゆる現象を目的論的な見地からみております。[...] 自然は目的に従って行動しません。[...] 存在するものは全てそれ自身のためにそこにあるのです。この存在の法則を求めることが，目的論的な思想に対立している思想の目標です。私はそれを哲学的と呼ぼうと思います。(PW2.S.157f.)

この『頭蓋神経について』の冒頭部分でビューヒナーは，自己の自然観を哲学との係わりにおいて述べている。それによれば，生理学と解剖学の

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

分野で「二つの対立する基本的見解」が存在することが強調されており，イギリスとフランスでは「目的論的な見地」に基づき有機体の現象が説明されているという。そして，ビューヒナーはこのような見解に否定的である。しかし，この記述が具体的に意味するところは推測するしかない。注釈によればベーコン，ホッブス，ヒュームらの経験主義，あるいはフランスのキュビエとの関係が推測されているが，それらを決定的に示す根拠がないことも指摘されている。以上の理由から目的論という用語の概念をさらに追求する必要がある。

目的論（Teleologie）とは哲学者ヴォルフにより専門用語化され，主に哲学で用いられるが，自然科学や社会科学にも及んでいる。その一般的な意味は，人間の行為の及ばない外部において神などの人格化された目的が予定されており，世界の機能や展開などが何らかの精神的な計画により決定付けられている，とするものである。従って，それは常に理念的であり，宗教的で神話的な点に特徴を持つが,[15] 大きく2つに分類される。「超越論的目的論」と「内在的目的論」である。前者は世界が外界から操作されているという目的論を意味し,後者は精神的な目的原理をものの内部に求め，その目的により内部が導かれているとする。「超越論的目的論」は外界の原理などの超越論的な存在者を想定することに特徴があるが，「内在的目的論」は伝統的にプロセス，形式，統一性を問題とするため，あらかじめ設定されている目的に向かって発展する，ということを意味している。[16] ビューヒナーの意図する目的論はいずれに該当するのか明白でない。ただ，彼は自己の目的論の概念を極めて分かりやすく説明している。例えば，彼は「涙腺は眼を湿らせるために存在している」（PW2.S.157）というような器官に関する説明が「自己以外のところに目的を持つものとしてのみ個体を認める」（PW2.S.157）ことであるとして，それを目的論と呼んでいる。従って，外界から支配されているという「超越論的目的論」と異なり，むしろ，あらかじめ設定されている目的に従うという「内在的目的論」を

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

指していると推測できる。言い換えれば，彼は器官に「有用性」を見出そうとする見解を目的論と言い表していると考えられる。しかし，この概念は極めて漠然としているため，比較的自由に論じられてきた。そしてビューヒナーの目的論批判は拡大解釈され，解剖学研究の枠を越え，社会批判あるいは文学作品と関連付けられた。

例えば，H・マイヤーである。彼はビューヒナーの目的論批判が先天的であり，後に自然科学研究の見解と社会批判において表れていると主張する。彼はビューヒナーがギムナジウム期の作文で「この世が試練の国」で「人生はただの手段」であるというキリスト教のドグマに対して，「人生はそれ自身目的」であると主張している点に着目し，それが目的論批判の発端であるという仮説を立てる。[17] H・マイヤーはこのように目的論批判を自然科学に限定せず，ビューヒナーという人物の本質として捉えているのであるが，それが後に市場主義への批判として継続されたとする。ビューヒナーは功利主義を原理とする市場経済の法則には「富者に自分の富があるのは自然の意志であるが，同様に貧者の貧困も自然の意志であると確信させる目的論」[18] が存在すると考えたというのである。その結果，ビューヒナーは社会において「苦悩とカオスと無秩序だけ」[19] を見出したのであるが，彼の「自然に置ける無目的な秩序への観照は自然の統一と調和への深い理解へと移行している」[20] として，「永遠の自然の国」[21] では「秩序とプランと調和」[22] が存在すると考えたと結論づける。つまり，ビューヒナーは自然における調和を目的論の支配する現実社会に対峙させたというのである。

類似する解釈をT・ホームズも行っている。T・ホームズはビューヒナーの目的論批判の影響を『ヴォイツェック』の「もし神様が人間を創りたまわなかったら，百姓も桶屋も靴屋も医者も何によって生きりゃいいんだ」（PW1.S.164.）という職人の台詞に見出し，それをアダム・スミスの『国富論』にある「私たちが夕食を当てにするのは肉屋や酒屋やパン屋の善意

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

によるのではなく，彼らの利害関係によるのである」[23] という部分と関連付けている。T・ホームズはこのように直接『ヴォイツェック』の台詞に着目しながら，そこに「正真正銘のエゴイズムの体系」[24] への風刺を見出している。この『ヴォイツェック』の台詞がエゴイズムという語とともに，『国富論』と関連付けられる理由は，市場における「個人は隣人に奉仕を示してのみ何かを獲得する」[25] のであるが，それが個人の利害を満たす行為でもあるからだという。そして，T・ホームズはそれを「ブルジョワ的目的論」という用語で表し，「目的論の自然観も自由市場への市民の弁護も個人の自己主張を上位の目的性のための機能へ刺激する」[26] ことであるため，共通しているという。自由市場において個人は他者のために存在価値があり，全ての人間にはそれ自身としてではなく市場のような上位の目的としての予定を構成するために存在意義がある。しかし，そのような世界観がビューヒナーの自然観に適合しないとして，『ヴォイツェック』で風刺されたとT・ホームズはいうのである。彼はビューヒナーの自由市場の法則への風刺が自然科学研究から学んだ世界観に由来するとして，彼を「自然科学者としての社会主義者」[27] であったと結論付けている。

ビューヒナーは解剖学研究を通じ何者にも制約されない固体の自由な発展を見出し，全ての生命を関係性から脱却した独自の存在であるとしたのだが，上の論述はそのような見解が社会観や文学作品にまで及んでいるとするものであった。ビューヒナーの全体像を考察すれば，このように社会思想と目的論批判を関連付けることが可能であるかもしれない。しかし，筆者はこれらの見解に対して全面的に同意することはできない。というのもこれらの見解は，ビューヒナーの目的論批判をあまりにも直接的に彼の伝記的事実あるいは文学作品と結び付けているからである。H・マイヤーはビューヒナーが少年期から目的論批判に近い考えを持っていたとするが，それは極めて限定的に用いられた概念ではなかったのか。ビューヒナーは「自然は目的に従って行動しません」というように，自然が制約を受け

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ずに発展するということを学んだ結果,目的論批判を行ったのである。従って，H・マイヤーは目的論批判をビューヒナーの思想としてではなく，視覚的な観察結果から生じたものの見方として捉えるべきであった。一方，T・ホームズも目的論批判に着目しているが，ビューヒナーが自然の調和的な美に傾倒する姿について詳しい論及を行っていない。筆者はむしろこの側面があるからこそ目的論批判が生じたと考える。ビューヒナーは解剖学研究で発見した自然の営みに美を感じ，それを目的論に対峙させたのである。

5.「美の法則」とカントとの関係

この章ではビューヒナーの美学観の特徴をカントの美学と比較することによって明らかにしたい。

ビューヒナーは1835年10月，家族宛の書簡で「ゲーテの友人でレンツという不幸な詩人に関するいろいろな意味で面白い覚書を手に入れた」（PW2.S.418f.）ことを告げ，レンツについての執筆をほのめかしている。そして，それが後に短編小説『レンツ』として実現することになった。当時，ビューヒナーはストラスブールに滞在しており新鮮な政治思想を吸収したことはよく知られるが，文学の執筆活動も続けていたのである。しかし，彼がこの時期に解剖学研究においても基礎を確立していたことを忘れてはならない。1836年4月にストラスブールで行われる予定になっていた『ニゴイの神経系に関する覚書』の講義へ向けて，前年の12月には準備をしていたのである。[28] この講義は後にチューリッヒ大学で博士論文として受領されるのであるが，ストラスブールで解剖学の権威デュヴェルノワの講義に参加したことにより研究が進展したことも付け加えておきたい。このように『レンツ』と解剖学研究はほぼ同時平行的にプランが練られたため，解剖学で獲得されたものの見方が文学執筆と交錯した可能性が高い。従って，『レンツ』の「芸術談議」で述べられた美学観と解剖学との共通点

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

を模索するということは年代記的にも妥当なのである。まず，『レンツ』においてビューヒナーは主人公に自己の美学観を投影させ語らせている。次の箇所である。

> ただ一つそのまま残るものがあります。それは一つの形態から他の形態へと移り変わり，永遠に様相を変え変化していく無限の美です。[...] それぞれに独自の本質に迫るには人間性を愛さなくてはなりません。何人にとってもあまりに卑しいとか，あまりに醜いというものがあってはなりません。そうゆうふうにしてこそはじめて人間性を理解することができるのです。最も取るに足らないような顔でも美の単なる感受より深い印象を与えます。そして，ものの姿は外界のものを模写することなしに自分の内部から作り出されるのです。外界からは生命も筋肉も脈拍も膨れ上がってきたり鼓動したりすることはないのです。(PW1.S.234f.)

ビューヒナーはレンツの口を借りて彫刻のような静止した美ではなく，「一つの形態から他の形態へと」変化する動的でありながら，根源的な美が存在することを述べている。さらに，彼はその内面にある不変のものに迫るためには「人間性を理解する」ことが必要であるとも説いている。美の根源において「人間性」という言葉が使われている点は注目に値する。なぜなら，この言葉によりビューヒナーの美学観には人間，すなわち生命の存在が含まれるからである。従って，この箇所から解剖学との関連が臆測できる。そして，これと似た表現が『頭蓋神経について』でも述べられている。以下の箇所である。

> そのように哲学的方法にとって固体の物質的存在の一切は，それを維持するために工面されるのではなく，根本法則，すなわち，最も単純な設計図と輪郭によって最も高度で純粋な形態を生み出す美の法則の現われとなるのです。形態

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

と質量はすべてこの法則に結びついております。全ての機能はこの法則の作用であって，それはいかなる外在的目的によっても規定されることはなく，またそのいわゆる合目的的な継起作用と共同作用というものは同じ法則の現れにおける必然的な調和以外のなにものでもありません。(PW2. S.158f.)

『レンツ』で語られた動的でありながらも根源的な美が存在するという認識は『頭蓋神経について』における「固体の物質的存在の一切は，それを維持するために工面されるのではなく，根本法則，すなわち，最も単純な設計図と輪郭によって最も高度で純粋な形態を生み出す美の法則の現われとなるのです」という箇所と類似している。そして，その「美の法則」は「外在的な目的」によって規定されないと述べられているが，それが『レンツ』の「ものの姿は外界のものを模写することなしに自分の内部から作り出されるのです」という箇所とも対応している。以上の共通性を考慮に入れると，ビューヒナーは解剖学研究を通じて見出した美の概念を『レンツ』の「芸術談議」に投影させたと推測できる。とりわけ，解剖学研究を通じて自然に「美の法則」を見出したことが彼の美学観の根底にあるのではないだろうか。以下，それについて考察したい。

O・デーナーはビューヒナーが『頭蓋神経について』で有機体の概念に基づき観察を行ったとしながら，「有機体の合目的性は彼により自然の調和というまったく別の視点から捉えられ，美学の領域に向けられている」[29]ことを指摘している。そして，ビューヒナーのいう有機体としての固体がただ単に機械論的に把握されているのではなく，美と調和の超越論的な世界において認識されている点に着目して，カントの美学を引き合いに出している。[30]

ビューヒナーは自然哲学者シェリングの影響を受けたオーケンの下で学んだことからも，カントとの関係が必然的に浮かび上がってくる。従って，筆者もカントとビューヒナーの関係を考察することに意味があると考え

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

る。しかし，その相違点を明確にすることの方がむしろ重要である。なぜなら，シェリングに代表される当時の自然哲学はカントが確立した物心二原論のアンチテーゼとして存在していたが，ビューヒナーの解剖学研究もその影響下にあり，カント哲学を克服しようとする営みであったと考えられるからである。

カントは先に述べたとおり自然の目的を神などの最高存在に求めることに批判的であったが，自然の法則ならば悟性に基づき知ることができるとした。しかし，『判断力批判』*Kritik der Urteilskraft* では自然の法則を客観的に知ることよりも，自然美に対する我々の認識の仕方が主要なテーマとなっている。カントは，我々が「何かあるものが美であるか否かを判別する場合には，そのものを認識するために表象を悟性によって客観に関連させることをしないで，構想力（おそらく悟性と結びついている）によって表象を主観と主観における快•不快の感情に関係させる」（KW5.S.203.）ということを述べている。美学的判断は我々の主観的な判断に依存しているというのである。従って，我々が自然に美を感じるということは，客体としての自然に美が存在しているからではなく，主観的な我々の判断に基づくということになる。そうすると，ビューヒナーは「個体の物質的存在の一切」が「美の法則」により形成されると認識したのであったが，それは自然法則として客観的に抽出されたことによるのではなく，主観的に認識されたということになる。そして，彼の解剖学研究は美学の領域に近づいたといえるのかもしれない。しかし，筆者は彼の自然美に対する見方はカントに倣い主観に限定されたものであるとは考えない。その理由は，カントの有機体の概念とビューヒナーのその概念との間には明確な相違が存在するからである。そして，それを明白にすることによってビューヒナーの美学観が映し出される。

カントは『判断力批判』において「有機的存在者」が「自然目的に客観的実在性を与える」（KW5.S.375f.）としている。このことは，有機体にお

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

いてのみ目的と成果の両方が統一的に把握されるため，目的論の仕組みが客観的に捉えられる，ということを意味している。これは自然神学が自然の目的を我々に不可知な神などの超越者に求めたのと対立する概念である。カントはこのように目的論を有機体に限定させることにより，それを客観的に判断できるとしたのであるが，「有機的所産において我々に示すところの実例において自然とその法則とから全体として合目的なものだけを期待することができる」（KW5.S.379.）とも述べている。この記述は有機体の内的な合目的性を一種の図式として把握することによって，自然全体の類推が可能であることを表している。そして，自然の目的は我々が主観的合目的性として美を認識するように，「我々の心的能力［構想力と悟性］（判断力の使用において，調和しつつ遊ぶところの）をいわば強化し，たのしませるのに役立つ」（KW5.S.359）ものであり，「美的形式」（KW5.S.359）であるという。

ビューヒナーは自然科学者としてカントのこの説明を熟知していたと思われる。しかし，筆者にはビューヒナーが有機体から自然全体を類推し，そこに自然美を感じたとは思えない。なぜなら，カントは自然を統一的に把握するためには目的論の使用が不可欠であるとするが，「自然における合目的性という語は，反省的原理を意味するだけであって，規定的判断力のことをいっているのではない」（KW5.S383.）として，それを経験的に認識できないとしているからである。つまり，目的論が人間の主観的な反省的原理から切り離され客体化されれば，それは人間の認識能力を超えた自然神学の誤謬と同じになるからでる。従って，我々は自然の目的を主観的な反省的判断力により思弁的に類推するしか方法はないというのである。

確かに，ビューヒナーはO・デーナーの指摘するとおり，有機体を美の領域において表現している。しかし，「神様は世界をあるべき姿に創った」（PW2.S.411)という自然神学的な目的論を書簡で述べたビューヒナーは

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

それを主観的な判断に限定させて理解したとは思えない。彼は生物を視覚的に観察する解剖学研究に通じていたために，客体的な自然そのものを直観として体験したのである。シェリングやゲーテはカントのいう人間の認識能力の限界を乗り越え，単なる反省的原理である目的論を現実のものとして捉えようとしたが,[31] ビューヒナーも彼らと同様の方向に進んだのである。

カントは自然美よりも人工美の方が我々の内面の自由から生じたものであるため，自然そのものよりも多くの美を創造できるとして評価している。[32] この見解は人間の理性が自然を凌駕するものであるとした近代の人間中心主義の思想に属すると言えるが，ビューヒナーの美学観と極めて対立的である。ビューヒナーにとって美なるものはカントのいう人間の主観的な判断によって創造されるものではなく，客体的な自然そのものが発散するものなのである。そして，これを描写することがビューヒナーのリアリズムである。

6．J・M・R・レンツの『演劇覚書』との類似性

ビューヒナーは有機体の織り成す美が人間の主観的な領域に限定されるのではなく，実体として自然に存在することを確信した。以上の事柄は彼のリアリズムの根源である訳だが，同時に彼がシュトルム・ウント・ドランクの劇作家であるJ・M・R・レンツ（以下ビューヒナーの作品のレンツと区別するため，J・M・R・レンツと記す）の『演劇覚書』*Anmerkungen übers Theater* に興味をもった理由でもある。ところが，ビューヒナーはこの演劇論について具体的に何も語っていないため，彼がこの演劇論のどの点を気に入ったのかということについては推測するしかない。そこで，この章ではビューヒナーが解剖学で得たものの見方がこの演劇論の関心へ至ったということを論じたい。その前にこの演劇論の概略を説明しておきたい。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

この演劇論はＪ・Ｍ・Ｒ・レンツが1771年ストラスブールにあった「哲学と文学のサークル」にて講演を行った内容を後に数年かけて加筆した後，1774年にゲーテの仲介によりライプチヒのヴァイガンド書店から出版したものである。どの研究者も指摘するように，この演劇論の論旨はまとまっておらず，文法的にも破格構文が多く，思いつくままに書かれた著作であるといわざるを得ない。従って，内容も錯綜しているのであるが，概ね「天才崇拝」，「模倣」，「フランス古典主義批判」，「シェークスピア賛美」に類別することができる。

Ｊ・Ｍ・Ｒ・レンツはまず「詩の本質は模倣であるということへのコメントをさせていただきたい」（LW1.S.431）と述べながら，アリストテレスの『詩学』における「そもそも，詩作には２つの自然的原因が機会となっているように思われる。というのも幼少のころから人間には模倣の習性があるからです」（LW1.S.432.）という部分を引用している。そして，彼はそれを独自の「模倣」の概念と結び付け，以下のように述べている。

> わたし達は一目であらゆる存在の最も深い特質を見抜き，感性でもってその特質の中にある全ての喜びを受け入れ，我々と統一させたいのです。（LW1. S.433.）

このようにＪ・Ｍ・Ｒ・レンツは人間の周りで普段見聞きされる自然を模倣する際に，その「特質」を「一目で」捉えることを要求している。そして，詩作をする場合には，我々の思考力や分析力などでは事足りず，天才の認識である「直感」が必要になるという。シュトルム・ウント・ドランクの詩人における天才崇拝が背景にあると言える。そして，Ｊ・Ｍ・Ｒ・レンツはそれを把握し，表現することを自らの演劇観の中心に据えている。そして，同様の批判は彼のフランス古典主義批判においても窺える。

Ｊ・Ｍ・Ｒ・レンツは模倣という行為を中心にして独自の演劇論を展開したが，かなりの部分をフランス古典主義への批判に費やしている。そし

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

て，フランス古典主義は三統一の法則に依存して，筋を単純なものに陥らせているから個性がなく，つまらないという。なぜなら，フランス古典主義はアリストテレスを受容したのであるが，その結果，性格よりも行為の優位性を求めたからだと理由を述べている。つまり，J・M・R・レンツはアリストテレスが行為により筋が展開されるというのに対して，筋を展開するのは性格であるとして，性格の優位性を強調するのである。レンツの主張する性格とは例えば，「酔っ払った兵士が部隊で眠り込み，不規則な時間帯に再び起きたりする」（LW1.S.431.）ような特徴を表現することであるが，彼はこのような人間の自由奔放で無目的な性格が筋を構築するための原動力になるとしている。

ビューヒナーは『頭蓋神経について』で有機体は「外在的目的によって規定されることはない」という認識に基づき目的論を批判し，生命体の自由な発展に美を見出した。このことはJ・M・R・レンツも同様である。なぜなら，彼は外的な筋により人間の性格が制限されることに否定的だからである。つまり，彼は人間の性格に生命力を見出したため，それの自由な展開を制約しようとする筋の優位性に拒否を示したのである。だが，彼の主張する性格の優位性に見出されるように，「（J・M・R・＝筆者）レンツが批判していることはアリストテレスの戯曲論ではなく，むしろ絶対主義によるドイツの政治社会システム」[33] である。

このように自然の本質を感性でもって見極める純粋な魂が啓蒙主義の閉塞状況において生じたのであるが，J・M・R・レンツはそれを開放するという意図を持っていたのである。それはビューヒナーが自己の自然研究において自然法則を客観的なデータに基づき分析しようとする近代の合理主義科学と違い，自然そのものの性質を「根本法則」から捉えようとしてそこに美を見出した時のものの見方と同じである。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

7．おわりに

デカルトが精神と自然を二分化させた後，合理的精神による科学が発達した。以降，人々は自然を支配し始め，多くの自然現象や世界の秩序や法則を解明したため，無知蒙昧とされた中世の世界観から解放された。しかし，ここで問題となることは観測され数量化されることによりただの法則へと還元され，姿，形を喪失した実体としての自然に関する問いである。ゲーテは実体としての自然に目を注がない科学のあり方に不満を持ち,[34] 近代の無機質な科学の状況を憂慮した。しかし，彼は幸運にも自然の姿を直観的に見，自然現象を具体的に感じ取り，その変態に気づくことができたのであった。同様の自然に対するものの見方がビューヒナーにも当てはまる。彼の解剖学はニゴイの神経系の位置関係を客観的に問おうとする半面，その時間的な生成過程を問題としながら,[35] 動的な変態を視覚的に追求したからである。そして，彼は動的な自然に「美の法則」を見出したのであったが，それはカントのいうように主観に制限されるものではなく，実体としての自然においてであった。つまり，ビューヒナーは自然の姿を人間の理性から解放し，描写しようとしたのである。彼のリアリズム的美学観は近代合理主義の下で抑圧されていく自然の姿を回復させるためのアンチテーゼとして存在している。

使用テクスト

以下の文献からの引用箇所には本文中で，略記号の後に巻号，ページを記した。

Georg Büchner : *Sämtliche Werke. Briefe und Dokumente.* Hg. v. Henri Poschmann u. Mitarb. v. Rosemarie Poschmann. Frankfurt a.M. 1992. Bd.1., 1999. Bd.2. [PW と略記]

Immanuel Kant : *Kants Werke. Akademie Textausgabe.* Hg. v. der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften. Berlin 1968. Bd.5. [KW と略記]

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

Jakob Michael Reinhold Lenz : *Werke in einem Band.* Hg. v. Friedrich Pustet Regensburg. München, Wien 1992. Bd.1. 〔LW と略記〕

注

1 高橋義人著『形態と象徴—ゲーテと「緑の自然科学」』岩波書店 1988年 123頁参照。

2 高橋義人 前掲書 124頁参照。

3 Hans Mayer : *Georg Büchner und seine Zeit.* Frankfurt a.M. 1972, S.367.

4 Otto Döhner : Neuere Erkenntnisse zu *Georg Büchners Naturauffassung und Naturforschung.* In : *Georg Büchner Jahrbuch 2/ 1982.* Frankfurt a.M. 1982. S.126.

5 Vgl. Wilhelm Doerr: *Georg Büchner als Naturforscher.* In: Georg *Büchner. Der Katalog.* Frankfurt a.M. u. Basel 1987. S.287.

6 J.H.ブルック著 田中靖夫訳 『科学と宗教—合理的自然観のパラドクス』工作舎 2005年 214頁参照。

7 松山壽一著 『ドイツ自然哲学と近代科学』北樹出版 1997年 106頁参照。

8 Vgl. Helmut Müller-Sievers : *Desorientierung. Anatomie und Dichtung bei Georg Büchner.* Göttingen 2003. S. 56.

9 Döhner : a.a.O., S.130.

10 Vgl. Doerr : a.a.O., S.287. 『ニゴイの神経系に関する覚書』はビューヒナーによりフランス語で書かれたものであるが，筆者はドイツ語訳と日本語訳を参照した。

11 Vgl. Müller-Sievers : a.a.O., S.75.

12 松山壽一 前掲書 165頁参照。

13 Vgl. Doerr : a.a.O., S.289.

14 Vgl.ebd., S.290.

15 Vgl. *Europäische Enzyklopädie zu Philosophie und Wissenschaften.* Hg.v. Hans Jörg Sandkühler. Hamburg 1990, Bd.4, S. 563f.

16 Vgl. ebd., S.564f.

17 Vgl. Hans Mayer : a.a.O., S.368f.

18 Hans Mayer : a.a.O., S.369.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

19 Ebd., S.379.

20 Ebd., S.372.

21 Ebd., S.379.

22 Ebd., S.379.

23 Adam Smith : *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. Oxford 1976, vol. I .pp.26-27.

24 Terence M. Holmes: *Die Befreiung der Maschine: Büchners Kritik der bürgerlichen Teleologie*. In: *Zweites Internationales Georg Büchner Symposium 1987*. Frankfurt a.M. 1990.S.55.

25 Ebd., S.53.

26 Ebd., S.56.

27 Ebd., S.62.

28 Vgl. Thomas Michael Mayer : *Georg Büchner Eine kurze Chronik zu Leben und Werk*. In : Text + *Kritik. Sonderband. Georg Büchner I / II*. Hg.v. Heinz Ludwig Arnold. München 1979, S. 408.

29 Döhner : a.a.O., S.128.

30 Vgl. ebd., S. 129. デーナーもビューヒナーの美学はゲーテの形態学やエンテレヒーの概念に近いと述べている。

31 松山壽一 前掲書 229頁参照。

32 Vgl. Daniel Müller Nielaba : *Die Nerven lesen. Zur Leit-Funktion von Georg Büchners Schreiben*. Würzburg 2001, S. 38.

33 Andreas Huyssen : *Drama des Sturm und Drang. Kommentar zu einer Epoche*. München 1980, S. 117.

34 高橋義人 前掲書 18頁参照。

35 Vgl. Müller-Sievers : a.a.O., S.62f.

参考文献

中村博雄著『カント「判断力批判」の研究』東海大学出版 1995年。

八亀徳也著「J・M・R・レンツの演劇論, »Anmerkungen übers Theater« について」関西大学文学会 1981年 38－48頁。

NII-Electronic Library Service